

氏 名	きし もと え み 岸 本 恵 実
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 241 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	十 六 ・ 十 七 世 紀 キ リ シ タ ン 資 料 の 研 究

論文調査委員	(主 査) 教 授 木 田 章 義	助教授 大 谷 雅 夫	助教授 大 槻 信
--------	----------------------	-------------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

「第1編 ヴァチカン図書館蔵『葡日辞書』について」では、現在ヴァチカン図書館に所蔵されている、ローマ字で書かれたポルトガル語と日本語の対訳語集の写本『葡日辞書』（原題 *Vocabulario da lingua Portuguesa*）の内容を主に国語学的に分析し、辞書編纂の目的や編者についても考察した。

『葡日辞書』は、標題紙(1r)、辞書の本文(2r-91r但し De. ante. E. から R.antes do. E. まで)、書簡の一部(91v)から成る横長の一冊で、これにシーボルトが書いたカードが付いている。辞書の本文は、アルファベット順に並んだポルトガル語に対して、ローマ字で一つないしは二つの日本語訳を付すというのが基本的な形式であるが、一つの見出し語に対して一つの訳語を当てるだけでなく、熟語や会話文を多く収めているのが特徴である。

日本語のローマ字綴りは、キリシタン版に見られる日本イエズス会式にほぼ準拠しているが、*y* や四つ仮名の混同など、規範から外れた表記も見られる。また、日本の文字が全く見られないこと、*fa* を *pa* と書くなどの誤りが見られることから、編者は日本人ではなかったと考えられる。語彙・方言などの面から分析すると、江戸時代初中期の成立であること、西日本の口語を基調に書かれていることが推測される。

ローマ字綴りから見てキリシタン資料としての性格をもつ本書であるが、多くのポルトガル語動詞に過去分詞形が示されていること、適当な日本語訳がなく「～ノ名」(例、鳥ノ名)と説明しているポルトガル語をいくつも見出しにあげていること、キリスト教関連の用語が全く見られないことなどから、外国人宣教師のためというよりむしろ南蛮通事のために書かれたとみられる。

旧蔵者であるシーボルトのカードによると、この辞書は17世紀初頭に日本で殉教したイエズス会神父ヨハネスのものであるという。シーボルトの手記と辞書の成立年代・編纂目的からみて、編者はキリシタンの教育を受け、南蛮通事に協力した棄教者であった可能性がある。この辞書はキリシタン資料としての性格をもちつつ、南蛮通事のポルトガル語学習のために書かれた、非常に特異な資料であるといえよう。

「第2編 キリシタン資料のローマ字表記から」では、キリシタン資料の写本・刊本のローマ字表記を、さまざまな角度から分析した。

「第1章 写本『葡日辞書』における *y* の使用」は、写本『葡日辞書』で多数見られ、他のキリシタン資料の日本語表記ではほとんどみられない *y* という表記について考察したものである。『葡日辞書』において、*y* は *y* より使用例数は少ないが、*y* とほぼ同じように用いられている。また同一語に対する表記に *y*、*y* の両方が用いられている例もあるため、*y* と *y* との間に明確な区別があったと考えることは難しい。*y* はポルトガル語表記にも用いられており、この場合も日本語表記の場合と同様の傾向を見せている。このことから、おそらく外国人であった編者がポルトガル語を表記するときの傾向が、日本語表記にも影響を与えた例であると推測される。

「第2章 八行四段動詞アウの発音」は、『葡日辞書』に見える例外的な表記例 *-au* を手がかりに、当時の発音について考

察したものである。キリシタンのローマ字資料では、ハ行四段活用動詞のうち語幹末がaであるものの終止・連体形は-ōと表記されている（例、笑ふ Varō）。従来この表記を根拠にして、これらの動詞の発音はオ段開長音であったとされてきた。しかし、『葡日辞書』にはこれを-auと書いた例が6例ある（例、洗ふ arau）。この辞書が西日本の庶民の口語を写しているとみられることから、実際にはこれらの人々の間では、長音でなく二母音に割る発音がなされていたのではないかという可能性を示唆した。

「第3章 キリシタン資料の拗音および連母音を表す-iaをめぐって」では、キリシタン資料において二種類の読み方のある-iaという表記について考察した。キリシタン資料の規範的なローマ字綴りでは、-iaという綴りはカ・ガ・ダ・ハ・バ・パ・マ・ラ行のア段拗音短音節と、イ段音+アの連母音の二通りのよみを表す。この二種類は、表記が同一であることからよみの混同が起こることが予想されるが、実際には表記上の区別が考え出されることはなかった。『日葡辞書』（1603年本編・1604年補遺刊）の語彙を調査すると、日本語では拗音-iaが出てくる場合ほぼ全て-iacuの形をとっており、実際の使用において連母音-iaと混乱する可能性は低く、表記で区別する必要は生じなかったと考えられる。

「第3編 キリシタン版国字本の本語表記」では、キリシタン版の国字本に見られる本語（原語）表記について考察した。

「第1章 キリシタン版国字本における本語の開合表記」は、キリシタン版国字本の「本語」の開合表記から、当時のオ列長音の発音に関する通説に疑念を呈したものである。キリシタン版の国字本では、ポルトガル語・ラテン語などの原語（本語）は仮名で表記されている。この本語表記において、オ段長音は開音・合音の両方の表記がみられる。この二種類の区別については、推測される当時のポルトガル語の発音から、[o]を開音で、[o̞]を合音で表記する傾向があることが確認できる。しかし例外も多く、対応関係が明確であるとはいえない。従来の通説では、ロドリゲスの『本大文典』の記述に基づいて、日本語の開音は[o:]、合音は[o̞:]であったと考えられてきたが、本語の開合表記の実態は、この通説を支持するものではない。

「第2章 キリシタン版国字本の本語表記における「え」「ゑ」の用法」では、キリシタン版国字本で本語を表記するとき用いられる「え」「ゑ」の使い分けについて分析・考察した。キリシタン版国字本では、本語の母音eを日本の仮名で表記するとき「え」「ゑ」の二種類の活字を用いている。この二種類は日本語や原語の発音の違いを表したのではなく、語頭では「え」を避け、[ゑ]を用いるという表記上の使い分けがなされている。このような「え」「ゑ」の使い分けは、どの国字刊本にも見られる。これは、日本の仮名資料で用いられていた、異体仮名を語頭・語中語尾で使い分ける手法を取り入れ、仮名資料で視覚的に捉えにくい、語と語の境界を明確にするための試みであったと考えられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本のキリシタン資料に関する研究であり、大きく四編に分かれる。

第一編は、ヴァチカン図書館蔵『葡日辞書』の分析である。『葡日辞書』は、16・7世紀頃の、ポルトガル語と日本語の対訳辞書である。これまで若干言及されたこともあったが、ほとんど研究されていない文献である。かなりの量があり、手書きであるために文字の判別が困難で、しかもポルトガル語の書き込みがあり、はなはだ扱いにくい辞書であったためである。本論文は『葡日辞書』に対する初めての本格的な研究となる。本論文では、『葡日辞書』の表記法を細かく分析し、基本的にキリシタンの規範的表記法に従っていること、また、特殊な表記をしているところもあることを明らかにした上で、その特殊な表記法の分析を行った。これらの作業は『葡日辞書』研究の基礎的な部分で、非常に退屈な仕事であるが、丁寧に調査して、以後の研究に役立つように基盤を整えており、地味ながら着実な仕事と評価できる。『葡日辞書』に用いられている日本語は、西日本の口語を基調としていること、ズ・ヅの混乱が多いことなどを指摘し、当時の代表的輸入品である医薬・織物・生糸や度量衡に関する語があること、キリスト教用語が掲載されていないことなどから、本書は南蛮通事のポルトガル語学習用のために作成されたものと結論する。

また、シーボルトが本書をヴァチカン図書館に寄贈した際に「日本で殉教したイエズス会の神父ヨハネス」とメモを付しているところから、その候補として、当時のヨハネスと呼ばれる宣教師を四人探し出したが、実際には、キリシタンの教育を受け、ポルトガル語に堪能であり、一七世紀以降、通事用の辞書を編纂できる者ということになると、棄教者のフェレイラ（沢野忠庵）も有力な候補者となりうることを論じている。シーボルトのメモの記述に反して、棄教者である可能性に思

い至るのは、理解力の柔軟さを示している。

第二編では、『葡日辞書』の中に、「失なふ」などのハ行四段活用終止形の6例が、[au]と表記されている現象を指摘し、ハ行動詞の「ふ(う)」が語幹末尾の[au]と融合して、広いオ段長音[o:]になっていたという、国語学界の定説に疑問を投げかけた。そして当時の日本の文献、時代的変容の可能性などを考慮して、当時であっても、非知識層や関東方言では、長音ではなく、[au]と二重母音で発音されており、それが写本などの緊張のゆるむ環境で表に表れたものと結論する。このような仮説は従来からあったが、証拠がなかったために、一般的に受け入れられなかったのであるが、『葡日辞書』の用例の中に、[au]と表記された例が発見されたことによって、定説を凌駕する大きな仮説となった。この成果は、日本語の音韻史を語る上で、非常に重要な成果である。このようなわずか6例の例外的表記に着目し、論を立ててゆく鋭い観察力は大いに評価されるべきである。

第三編では、国字版「ドチリナキリシタン」の前期版と後期版で、「本語」の表記が変化するが、それは後期版では、当時のポルトガル語のo母音の違いに忠実に合わせたためであると結論する。また、後期版では、語頭は必ず「ゑ」を書くこと、それが他のキリシタン版と共通すること、さらにそれが、世阿弥自筆文書や狂言台本など、当時の日本の文献とも共通していることから、当時の仮名遣の影響があることを立証した。

第四編では、ロドリゲス「日本小文典」の中に用いられた、「仮名遣い」と「五音」という術語の意味を探っている。この「仮名遣い」という概念は、「五音」に基づく仮名の使い分けであり、活用のような語形変化を含めて考えていること、それも当時の仮名遣の概念を取り入れたものであることを論じている。そして「日本小文典」では、外国人にとって習得の難しい活用形を導き出すために、これらの用語を使ったと結論している。しかし、これらはロドリゲスの前著「日本大文典」では使用されていない用語であるので、「日本大文典」がなぜこれらの用語を使用しなかったのかという点も明らかにする必要があるだろう。

以上のように、本論文は16・7世紀の日本語やキリシタン資料研究の新たな発展を促す内容の論文となっているが、『葡日辞書』の編者については、さらに追求する道がありそうであるし、当時のポルトガル語の復元などについても、古典ラテン語との関連を明確にしなければならないなど、さらに考究すべき部分が残っている。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2003年1月20日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。